

# 『文海』の「偽平声」から見る西夏語音韻学の複層性 ——西夏文字の字音推定の限界の所在について——

濱田 武志  
神戸市外国語大学

**【要旨】** 本論文は、西夏語の韻書『文海』の、第三字で調類を指定する特殊な反切について考察する。『文海』巻一(平声卷)掲載字のうち、反切に第三字「統」「上」を伴うものは本来上声で読むはずの「偽平声」字の一部である。「偽平声」が生まれた理由は、異なる調類の間で韻目が合併したためと考えられる。換言すれば、「偽平声」字は上声の「欠番韻目」所属字であり、具体的には R13, R32, R39, R41, R50, R83, R88, R102 の上声韻が「欠番韻目」と考えられる。但し、反切の繋聯状況と「反切下字が調類の指示機能を担う」という前提からは、数多くの字が「偽平声」である可能性が得られてしまう。これに対し本論文は、『文海』内部で反切の理論的基礎と分韻の学理との間に不一致がある可能性、ならびに、この不一致が西夏語音韻学自身の複層性に由来しており、『文海』内部に西夏語音韻学のより古い学理の分析結果が痕跡的に残存している可能性を指摘する\*。

**キーワード:** 西夏語, 西夏語音韻学, 漢語音韻学 (中国音韻学), 反切, 韻書

## 1. 問題の所在

### 1.1. 「偽平声」および「欠番韻目」の存在の可能性について

西夏では中国の伝統的な言語科学である小学の影響を強く受け、自らの言語や文字である西夏語や西夏文字を分析する学問が発展した。特に、字音の分析法を模倣した西夏語音韻学(荒川 1997: 1)が成立し、西夏人が宋代当時の音韻学の知見や方法を西夏文字に応用した事実は、西夏学のみならず、中国語学や言語学史にとっても強い関心の対象である。以下、西夏語音韻学が模範とした、漢語を対象とした音韻学を「漢語音韻学」と呼ぶ(「中国音韻学」もよく用いられるが、西夏語と漢語を対比して「漢語音韻学」の術語を採る)。ただ、留意すべきは、当時の西夏人が受容した音韻学が、現代人が知る所の音韻学、すなわち、清末頃の伝統的な音韻学を基礎として、近代的言語学の方法を受容して成立した、歴史言語学の隣接分野としての音韻学とは必ずしも完全には一致しないということである。

西夏語音韻学の資料には、現代の言語学者や中国語学者にとって不可解な現象がしばしば見られる。西夏語に平声と上声の2つの調類を認める根拠は『文海』

\* 本論文執筆にあたり査読者の先生方から貴重なご教示を賜った。衷心より御礼申し上げる。本研究は科学研究費助成事業若手研究(19K13178, 22K13118)の成果を含む。

(1.2.1.1 参照) を主とする、字の調類を明示する出土文献の存在である。『文海』は調類に従い巻を分けるため、字の調類は収録巻により自動的に決まる。ところが『文海』のもう一つの表音法「反切」(1.2.2 参照) のうち、一部は調類名「平」や「上」を指示する第三の字を伴うという例外的形式をとる。そして、その第三字の調類が何故か巻の調類と相違する場合がある。

本論文は上述の現象を、「偽平声」という概念の導入で説明可能と考える。偽平声とは、非平声字が西夏語音韻学の資料によって、反切以外の方法で「平声字」と定義せられる現象、または字を指す。偽平声の字は典型的には、『文海』の第一巻(平声字の巻)に収められた、反切第三字から上声の指定を受けた字である。本論文は偽平声の発見を通じて、平声と上声という分類単位の、ある種の不確定性が西夏語音韻学に存在するという仮説を提起する。すなわち、西夏語音韻学の当時の論理における調類の枠組みは現代言語学的な意味での調類と完全には一致せず、出土資料が明示する調類を無条件に当該字の「真の調類」と見なせるとは限らないと本論文は考える。

西夏語音韻学では平声に第1韻から第97韻の、上声に第1韻から第86韻の「韻目」(rhyme group. 韻母 (rhyme) の相同性・類似性に基づく分類単位。1つの韻目が複数の韻母を含むこともある)をそれぞれ設ける。例えば平声第14韻(以下、平14)と上声第12韻(以下、上12)は「調類の違いで互いに対立するミニマルペアを持つ韻目」同士である。一方、平6や平13、上20のように「異調のミニマルペアを持たない韻目」もある。現代の西夏語学では「通韻」という概念を用い、全ての韻目を統一的に表現することがある。例えば平5・上5を「R5」、平6を「R6」、平7・上6を「R7」のように呼ぶ。西夏語にはR1からR105までの通韻がある。

偽平声の存在は、西夏語音韻学の当時の分韻体系が純粋に音韻的根拠のみから創り上げられたものでないことを意味する。後述するように、対応する上声韻を持たないとされる平声韻のうち、少なくとも平13(R13)、平31(R32)、平38(R39)、平40(R41)、平48(R50)、平78(R83)、平83(R88)、平94(R102)に、偽平声の字が存在していると考えられる。換言すると、『文海』の反切は時として、存在しないはずの上声韻で字を読むように指示するのである。すなわち、偽平声の存在からは、①西夏語音韻学の体系には「欠番韻目」が存在しており、②「欠番韻目」は対応する異調の韻目への吸収によって生じたと考えられるものの、③資料的制約から、偽平声(ひいてはその反対概念としての偽上声)の字や欠番韻目を全て発見するために十分な根拠が永久に失われている可能性もある、という仮説が得られる。

なお本論文では西夏文字の字音として、現在最も普及している龔煌城氏による推定案(以下、龔氏案。Gong 2003等)を各字に記す<sup>1</sup>。調類は音節末の数字で表す

<sup>1</sup>ただし筆者は龔氏案を全面的には受容していない。「韻目の区別は韻母の分節音の差異に基づく」という漢語音韻学の常識が、西夏語音韻学でも成立するとは限らないことを示唆する研究が近年見られる。例えばGong(2021)は龔氏案が「韻腹(nucleus)の長短の対立」を反映すると見なす韻目の対が、実は前接鼻音を伴う有標の音節と、前接鼻音を伴わない無標

(<sup>1</sup>)は平声,<sup>2</sup>)は上声)。必要に応じて、調類や所属韻目、文献中の出現位置を示す<sup>2</sup>。

また、西夏文字が「一字一音」であるという基本原則を今日の西夏語学は採る。この前提は荒川(2018)が(現代人の目には)形態が酷似して見えるいくつかの筆画に対立を発見して以降、更に鮮明化した。一字一音でないことが確実な字が僅かにあることも事実だが<sup>3</sup>、しかし「一字多音」の例は多く見積もっても西夏文字全体の1%未満であり、本論文の議論を揺るがさないと考えられる。本論文では暫時、「一字一音」の仮定の上で議論を行う。

## 1.2. 西夏語の声調を推定する根拠

西夏語が声調言語であったことはほぼ異論がない<sup>4</sup>。西夏語は死語であり、西夏語音韻学は湮滅した学問である。20世紀初頭、西夏時代の都市遺構である黒水城(Khara-Khoto)の出土資料により初めて、近代人は西夏語音韻学を知った。

西夏語音韻学の文献は韻書(字音に基づき字を排列した字書)と韻図(日本語の五十音図のように字を配置した図表)に大別できる。韻書は『文海(後篇)』(『文海宝韻(後篇)』)、『大白高国文海宝韻(解氏)』(『解氏)』)とも。以下、西夏語の書名は通用する漢語訳を挙げる)と『同音(龍龍)』(『同音』)のほか、『同音』を基礎としつつ『文海』の注等を合わせた『同音文海宝韻合編』(正確な書名は不明)

の音節の対立を表すという説を提唱する。濱田(2022a)は、いわゆる第3環(捲舌母音)が韻母の音価ではなく、音節先頭がr-か否かに基づき分立した分類群である(すなわち、二重子音rC-または単子音r-を声母として持つ音節のみが第3環に属する)ことを提唱しつつ、荒川(2014: 82)などが提唱する、第2環(緊喉母音)と第3環の特徴を兼有する字音「緊喉・捲舌母音」の存在を支持する。ただ、これらの議論は発展途上にあるため、本論文では便宜的に龔氏案を読者の参考に供する。なお、注8で論ずる「𐰽」など、推定音が先行研究間(Kычанов et al. 2006, 李范文 2012, 賈常业 2019, 韓小忙 2021 など)で大きく異なる例が存在することも附言しておく。

<sup>2</sup>『文海』甲種本の見出し字の位置情報の表記は慣例に従う。頁はピリオドの直前に、頁の表(1)と裏(2)はピリオドの直後に、行数はその直後に、行中での出現順は末尾に、それぞれ記す。「𐰽 gjwii<sup>1</sup>」は『文海』甲種本の第20頁表第5行目の2番目に現れる見出し字なので、“20.152”と表す。甲種本にない字は、韓小忙(2021)に倣い乙種本での位置を示す。「𐰽 bji<sup>2</sup>」は巻2第33頁裏第6行4字目の大字の殺、②33B6.4と記す。

<sup>3</sup>「𐰽(平3(R3) djwu<sup>1</sup> “漬(して殺)す”, 平11(R11) djwi<sup>1</sup> (音訳字))」は、『文海』甲種本や『同音』「新版」系諸本が「一字二音」と明言する。『文海』平声第80韻(R85)に二度出現し、どちらも「鼓」を字義とする「𐰽」も「一字二音」の候補である。その他の例(濱田 2022b)についての議論は割愛する。

<sup>4</sup>ただし、西夏語の声調発生論の全容は明らかになっていない。西夏語の系統については、例えばLai et al. (2020)が西夏語をWest Gyalrongicに定位するなど新たな展開がみられるものの、Gyalrongicを含めた多くのTibeto-Burmanの言語は声調を持たず、そして西夏語との間に声調上の整然とした対応関係を持つ言語も存在しない(Mazaudon 1977, Matisoff 2001 など)。「西夏語の声調は2つ」という認識は、確かに作業仮説として有効であるものの、西夏語音韻学が示す調類の実在性や正確性は積極的証明が試みられたことがない。この意味で、西夏語音韻学が設定する調類や韻目の枠組みの再考を試みる本論文は、東アジアの言語学史における一種の特殊事例としての西夏語音韻学と、一般的歴史言語学との合流点を模索する研究でもある。

が知られる。韻図は唯一『五音切韻 (儼龍絳籟)』が知られる。個々の字の調類を同定する直接の資料は以上の4点である。このほか、書名未詳の文献の残頁もあるが(史金波 2002: 114, 西田 2012: 124, 孫伯君 2016), これらには個別の字音の情報が含まれていない。

また、西夏語と漢語の双方向の対訳・対音資料『番漢合時掌中珠(緜緜緜緜絳絳絳)』や、漢語由来の固有名詞・借用語の西夏文字表記、チベット文字音注つき西夏語仏典、西夏文字による陀羅尼音写なども、字音復元の根拠となり得る。しかしこれらの資料は、チベット文字音注が西夏語の平声と上声を書き分ける意図を持っていた蓋然性が高い(荒川 1999) ことを除き、声調の具体的情報をほぼ提供しない。なお、漢語は西夏(宋)の時代も声調言語のはずであり、漢語・漢字の資料から西夏語・西夏文字の声調の情報を得ることが難しい現象それ自体がそもそも興味深い、本論文ではこの問題に立ち入らない。

## 1.2.1. 西夏語音韻学の出土資料の概要

### 1.2.1.1. 『文海』

『文海』は甲、乙、丙種本が現存する。ロシアのコズロフ(Пётр К. Козлов)の探検隊が20世紀初頭に黒水城で発掘し、ロシアの東洋学研究所サンクトペテルブルク支部が所蔵している。『文海』本体は、平声字を掲載する巻一と、上声字を掲載する巻二から成り、その後「雑類(絳絳)」という部分が続く。各巻はそれぞれ97個、86個の韻目へと分けられ、韻目の内部はさらに同音字の集まりである「小韻」に分けられる。小韻は原則として、西夏語音韻学が定める声母(onset)の類別の序列にしたがって並ぶ。韻目が複数の韻母を含む場合は、小韻の排列が複数回循環する。このようにして、『文海』本体は西夏文字全体を声調、韻目、声母の順で細分している。一方、雑類は『文海』本体と異なり韻目を立てず、声調、声母の順で細分化を行う。本論文は「雑類」を、『文海』本体の分類体系からあぶれた“others”の字を収めたものとする。西夏語学では、主に反切を根拠として雑類所収字にも韻目を定義することが一般的だが、本論文はこれを採らない。従って本論文は、雑類所収字を「無韻目字」として、考察対象から暫時除外する。

『文海』は正確な編者や編年が不明である。ただし乙種本の序文から、『文海』は官製の韻書であったと推定できる(史金波 1999: 42-43)。また、序文中の西夏の元号と干支から、乙種本は1072年以降に成立したと考えられ(史金波 1999: 42), 『文海』が11世紀後半には既に存在していたことは確実である。なお、甲種本は背面に漢文の軍事文書が書かれており、そこには南宋の建炎2年(1128年)の年号が見られる(史金波 1999: 42)。

『文海』甲種本は楷書体を採用の木版本である。各見出し字に割注で字形構造、字義、そして反切を示す。見出し字に関する情報量が多いこと、特に、反切を明記した唯一の版本であることが甲種本の特徴である。甲種本は序文や巻二全体などが失われてしまっている。

『文海』乙種本は、甲種本に極めて近い系統の刊本が、複数人の手の伝写を経て成立した略抄本と考えられる（濱田 2022b）。字の判読性は甲種本に比して落ちるが、巻二や序文の大部分が残り、巻一と巻二の巻頭には韻目の一覧および韻目代表字が残存している。

『文海』丙種本は、韻図『五音切韻』丁種本の附録として作られた、各韻目の見出し字のみを列挙した抄本である。情報量は丙種本が最も少ない。

### 1.2.1.2. 『同音』

『同音』の初版の編者は切韻博士（𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄）である令吹犬長（𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄）と羅瑞靈長（𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄）であり、後に複数回にわたって編集の手が加わった。現在影印が公刊されている諸本は、「旧版」と「新版」の2系統に分けられる<sup>5</sup>。旧版系は東洋学研究所が所蔵する所謂甲種本と、大英博物館所蔵のわずかな残片のみが残る。それ以外は全て新版の系統に属す。

『同音』旧版（甲種本）の跋文には正徳6年（1132年）の年号が見られる。新版には具体的な年号が見られない。Невский（1960b: 120）は、新版の編者の梁徳養が乾祐7年（1176年）から編纂していた諺語集『新集錦合辞』（𐽀𐽁𐽂𐽃𐽄𐽅𐽆𐽇𐽋𐽍𐽎𐽏𐽐𐽈𐽉𐽊𐽌𐽑𐽒𐽓𐽔𐽕𐽖𐽗𐽘𐽙𐽚𐽛𐽜𐽝𐽞𐽟𐽠𐽡𐽢𐽣𐽤𐽥𐽦𐽧𐽨𐽩𐽪𐽫𐽬𐽭𐽮𐽯𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿𐽰𐽱𐽲𐽳𐽴𐽵𐽶𐽷𐽸𐽹𐽺𐽻𐽼𐽽𐽾𐽿）が、梁徳養没後、王仁持という別人の手で乾祐18年（1187年）に刊行せられた事実を踏まえ（Невский 1960d: 92）、『同音』新版もまた梁徳養が乾祐7年（1176年）以前に編集を行っていたと推定する。

『同音』と『文海』は分類体系が大きく異なる。『同音』（全一卷）は声母の類別に従い「品」を9つ設け、西夏文字全体を九分する。そして各品の下位の分類単位として「小類」（西田 1964-1966）を立てる。品と小類の間に中間の分類単位は存在せず、各品は小類を羅列するばかりで、小類の排列原理も未解明である。同音字を持たない字は各品の後半に「独字」としてまとめている。『同音』は分節音の音価や調類の情報を直接的には示さない。

また、『同音』は両系統の間で小類の立て方に相違がある。旧版では同一分節音の異調の字が同一小類に収められる事例が多く見られる一方、新版では異調の字が分けられる。この違いは、新版が（自ら重校序で述べるように）『文海』など他の音韻資料を参照したことに起因すると考えられる。『同音』の小類の立て方については第3章で再び論ずる。

### 1.2.1.3. その他の韻書・韻図

『文海』と『同音』以外の韻書・韻図については紙幅の関係上、言及は簡潔にとどめる。『同音文海宝韻合編』は、編者や編年等が不明の韻書である。同書は基本

<sup>5</sup> 両系統の序文や跋文の記述から、『同音』には少なくとも5種類の系統が存在したという推定が、古くは史金波 et al. (1992: 2) により示されている。第3の系統に属すると思しき『同音』の残頁が現存するらしいことを景永時（2014; 2016）が報告しているが、本論文の執筆時点でそれは未公開である。

的に『同音』新版の順に並んだ見出し字に対し、『文海』甲種本のように字形構造や字義、反切を示すほか、各字の「声類」（声母の類別）と韻目、調類を記す。『同音文海宝韻合編』が示す調類には特異性が見られることがある。同書は大多数の字に対して「平」か「上」の調類を指示するが、一部の字には「平去」、「上入」、「平上」、「上去」のような調類名を示す。

『五音切韻』は現存する唯一の韻図である。『五音切韻』もまた105韻の枠組みを採用しており、97個の平声韻と86個の上声韻の対応関係を明示する資料である。

### 1.2.2. 反切について

ここで、西夏語音韻学に受容せられた「反切」についてまとめて述べておく。

反切とは、「反切帰字」（被切字）の字音を、それ以外の2つの「反切用字」で指示する表音方法である。反切用字の一字目「反切上字」は反切帰字の声母を、二字目「反切下字」は韻母と声調を、それぞれ指示するのが原則である。反切帰字・反切用字の組を芋づる式につなぐことを「繋聯（する）」といい、反切の繋聯を繰り返して声母や韻母の対立状況を明らかにする手法を「反切繋聯法」と呼ぶ。

反切の起源は紀元後2世紀半ばの後漢の時代に遡るといわれる（小川1951: 35-36）。反切は発生当初から、反切用字の口唱を通じて反切帰字の字音を示唆することを企図していたと考えられる（中村2003は実際の口唱法に関する種々の仮説を3種に分類する）。漢語の母語話者にとって、音節を声母と韻母・声調とで二分する方法は、直感に沿うものだったと考えられる。漢語には古くから、第一音節と第二音節が声母または韻母の相同性を持つ擬態語的な二音節語が多く見られる。この事実は、反切の誕生を漢語の母語話者の言語感覚と関連付けることの妥当性を傍証する。例えば「躊躇（ちゅうちよ・ $\text{tʃu} \text{ tʃu}$ )」「參差（しんし・ $\text{tʃʰrɛm} \text{ tʃʰrɛ}$ )」「荏苒（じんぜん・ $\text{rɛm} \text{ rɛm}$ )」「嘘唏 / 歔歔（きょきょ・ $\text{hɛ} \text{ hɛ}$ )」が双声の例として、「窈窕（ようちょう・ $\text{ʔeu} \text{ deu}$ )」「辟易（へきえき・ $\text{pʰiɛk} \text{ jiɛk}$ )」「徘徊（はいかい・ $\text{bui} \text{ hui}$ )」「朦朧（もうろう・ $\text{mow} \text{ lo}$ )」が疊韻の例として、それぞれ挙げられる（中古音は平山2018: 13-16に基づく）<sup>6</sup>。

声調について補足すると、漢語音韻学における「四声」とは、沈約が永明年間（483～493）に『四声譜』を著したころに確立した概念といわれる。一方、「声調」という概念の発見がどこまで遡り得るかは未詳である。ただ小川（1951: 36-38）によれば、2～3世紀において声調は既に反切下字を選択するための要件となっていた。すなわち、反切下字は反切帰字と同一の声調を持つものが選ばれていた蓋然性が高

<sup>6</sup> 反切は必ずしも万能でない。同一韻目の小韻が少ないため適当な反切下字が見つけれない場合もある。漢語の韻書『広韻』巻第三（上声卷）の韻目「拯韻」の小韻のうち、「拯」の小韻には反切がなく、注の末尾で「無韻切。音蒸上聲」（この小韻は）反切を持たない。字音は「蒸」を上声で読む」と説明を与えている（黒水城出土の北宋本『広韻』でも同様。俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所 et al. 1996: 174, 聶鴻音 et al. 2006: 39を参照）。注9の冬韻上声の例も参照。

いと考えられる。

反切は、漢語音韻学、ひいては西夏語音韻学における代表的な表音方法である。一方、反切のように分節音の音価を示唆するのではなく、韻書内部を細分化して入れ子状の分類体系を構築し、音韻的な差異、すなわち「類」の違いを示すこともまた、一種の表音方法である。『文海』はこの2種類を併用した韻書である。ただ、反切と、韻書の内部構造それぞれが示す情報の無矛盾性を保障するものが存在することの証明は難しい。

### 1.2.3. 出土資料が示唆する声調の不確定性

Nevsky (1928: 34–35) は『文海』甲種本「雑類」第九品末尾の残頁（俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所 1997: 171 の110–100に相当する箇所）の最終行に「嵒龍」（上声。Nevsky 1928: 34 “rising tone”）とあることを発見し、これに基づき、同書が漢語の韻書と同様に、声調に基づいて字を類別していると推測する。これが、西夏語音韻学に「声調」の概念が存在することに最初に言及した論考である。さらに Невский (1960b: 129) では『文海』乙種本が平声と上声・入声の二巻から成ることが、Невский (1960c: 134) では『五音切韻』序文に平声・上声・去声・入声の四声に対し言及があることが、それぞれ指摘せられている。

Софронов et al. (1964: 31–36) は、西夏語音韻学が西夏語に対して2通りの方法によって分析を行っていた可能性を述べる。同書は、「音声学的な分析」を行う文献は平声、上声、去声、入声の4声調を立てた一方で、「音韻論的解釈」を採る文献は平声、上声の2声調を立てたために、文献間で西夏語の声調の数え方が異なっていると考えた。また、同書は『同音』の序文が示す西夏文字の字数と、『文海』の残存部分の字数の差から、『文海』の亡失部分の字数を計算し、その値が一つの調類を成すには少なすぎることを根拠に、『文海』は平声と上声の区別しかなかったとも述べている。なお当時は、『文海』甲種本と乙種本が同一文献の木版本と手抄本の関係にあることは未立証であり、Софронов et al. (1964) が述べる『文海』とは『文海』甲種本のみを念頭に置いたものである。従って、『文海』乙種本巻二の巻名に「上声・入声」とある事実はここで考慮されていない。

かかる時代の制約があるとはいえ、平声字以外の字のほとんどが上声字と考えられること、Софронов et al. (1964) が早くも言及しているように『五音切韻』が平声と上声のみについて各韻目の代表字を掲げていること、などの根拠から、西夏語の調類数を2とすることは現在の共通認識となっており、『同音文海宝韻合編』が調類名の一部として掲げる「去」や「入」、『文海』乙種本のいう「入声」は、声調に関する何らかの周辺的な言語事実を反映したものに過ぎないと考えられている。ただ、これらの術語が表そうとした言語事実については未解明であり、本論文もまたこれについて未だ明確な答えを持たない。

## 2. 『文海』所収字の調類の不透明性あるいは非決定性

### 2.1. 「偽平声」, 「欠番韻目」の存在の立証

『文海』巻一に載る字は必然的に、全て平声を声調に持つと演繹的に判断できる。実際に、各小韻の反切下字は確かに、その多くが平声巻の所載字であり、基本的に反切母字と同一韻目に所属する字である。

反切は、字音の情報を2分割して処理する行為である。反切の末尾に調類を指すと考えられる字「𠄎 (平 39 (R40) ·jii<sup>1</sup>)」「平 (直訳は“平らな”)や「𠄎 (上 3 (R3) phju<sup>2</sup>)」「上 (直訳は“うえ”)を記す行為は、反切本来の原理から逸脱している<sup>7</sup>。この「𠄎 (平 39 (R40) ·jii<sup>1</sup>)」や「𠄎 (上 3 (R3) phju<sup>2</sup>)」が調類を指すことは、ほぼ確実である。西夏語音韻学の術語は漢語音韻学からの翻訳借用で生まれたと思しきものも少なくない。調類名はその一つであり、漢語の四声「平・上・去・入」に対応する形で「𠄎 (平 39 (R40) jii “平らな”)・𠄎 (上 3 (R3) phju “うえ”)・𠄎 (平 29 (R30) sji “往く”)・𠄎 (上 42 (R51) ·o “入る・容れる”)という術語が創られている。字音の音韻情報を示す箇所「𠄎 (平 39 (R40) ·jii)」や「𠄎 (上 3 (R3) phju)」が用いられているとき、それが調類名以外を意味した蓋然性は低い。実際、『文海』は巻名に「𠄎𠄎 (“平らな”)・“音, 声” ⇒ “平声”)」, 「𠄎𠄎 (“うえ”)・“音, 声” ⇒ “上声”)」という語を使っている。

さて、『文海』の本体部分のみを集計すると、第三字に「𠄎」「平」を持つ例のうち、3例を除き、全て反切下字が上声字である。

<sup>7</sup>『文海』甲種本には、他にも様々な特殊反切が確認できる。聂鸿音 (2015) を参照。

表1 第三字に「𠄎」“平”を持つ反切の事例

小韻に含まれる字 (反切婦字)	反切婦字 の韻目	反切上字	反切下字	第三字	反切上字 の韻目	反切下字 の韻目
訛 (20.152) gjwii <sup>1</sup>	平 14 (R14)	𠄎 gjuu <sup>1</sup>	𠄎 tsjii <sup>2</sup>	𠄎	平 7 (R7)	上 12 (R14)
𠄎 (20.161) gjwii <sup>1</sup>	平 14 (R14)	𠄎 gjuu <sup>1</sup>	𠄎 sjwii <sup>2</sup>	𠄎	平 7 (R7)	上 12 (R14)
𠄎 (20.162) gjwii <sup>1</sup>						
𠄎 (49.133) kheej <sup>1</sup>	平 37 (R38)	𠄎 khjuu <sup>1</sup>	𠄎 neej <sup>2</sup>	𠄎	平 7 (R7)	上 34 (R38)
𠄎 (49.141) kheej <sup>1</sup>						
𠄎 (51.162) tšhiwəj <sup>1</sup>	平 41 (R42)	𠄎 tšhjwi <sup>1</sup>	𠄎 tšiwəj <sup>2</sup>	𠄎	平 10 (R10)	上 36 (R42)
𠄎 (54.241) sjwii <sup>1</sup>	平 45 (R46)	𠄎 sjwov <sup>1</sup>	𠄎 tsjwii <sup>2</sup>	𠄎	平 56 (R58)	上 40 (R46)
𠄎 (57.112) thwo <sup>1</sup>	平 49 (R51)	𠄎 thji <sup>1</sup>	𠄎 lwo <sup>2</sup>	𠄎	平 11 (R11)	上 42 (R51)
𠄎 (57.121) thwo <sup>1</sup>						
𠄎 (57.122) thwo <sup>1</sup>	平 49 (R51)	𠄎 thji <sup>1</sup>	𠄎 ŋwo <sup>2</sup>	𠄎	平 11 (R11)	上 42 (R51)
𠄎 (62.213) sjwov <sup>1</sup>	平 56 (R58)	𠄎 sjwi <sup>2</sup>	𠄎 lhjow <sup>2</sup>	𠄎	上 9 (R10)	上 49 (R58)
𠄎 (68.153) ljwi <sup>1</sup>	平 61 (R64)	𠄎 ljwi <sup>2</sup>	𠄎 zjwi <sup>2</sup>	𠄎	上 60 (R70)	上 54 (R64)
𠄎 (68.161) ljwi <sup>1</sup>						
𠄎 (68.262) kjwii <sup>1</sup>	平 62 (R65)	𠄎 kjwi <sup>1</sup>	𠄎 xjwi <sup>2</sup>	𠄎	平 67 (R70)	上 55 (R65)
𠄎 (68.271) kjwii <sup>1</sup>						
𠄎 (71.271) twə <sup>1</sup>	平 65 (R68)	𠄎 tu <sup>1</sup>	𠄎 lwe <sup>2</sup>	𠄎	平 58 (R61)	上 58 (R68)
𠄎 (77.272)·wo <sup>1</sup>	平 70 (R73)	𠄎 wu <sup>1</sup>	𠄎 lo <sup>2</sup>	𠄎 + 𠄎	平 58 (R61)	上 62 (R73)
𠄎 (83.232) kjir <sup>1</sup>	平 79 (R84)	𠄎 kjwii <sup>1</sup>	𠄎 wjir <sup>2</sup>	𠄎	平 92 (R100)	上 72 (R84)
𠄎 (86.161) tjwar <sup>1</sup>	平 82 (R87)	𠄎 tj <sup>1</sup>	𠄎 pjar <sup>2</sup>	𠄎	平 67 (R70)	上 74 (R87)
𠄎 (86.162) tjwar <sup>1</sup>						
𠄎 (41.142) kwə <sup>1</sup>	平 31 (R32)	𠄎 kuu <sup>1</sup>	𠄎 dwə <sup>1</sup>	𠄎	平 5 (R5)	平 31 (R32)
𠄎 (63.241) ku <sup>1</sup>	平 58 (R61)	𠄎 kier <sup>1</sup>	𠄎 lu <sup>1</sup>	𠄎	平 78 (R83)	平 58 (R61)
𠄎 (63.242) ku <sup>1</sup>						
𠄎 (90.251) wor <sup>1</sup>	平 89 (R95)	𠄎 wer <sup>1</sup>	𠄎 yor <sup>1</sup>	𠄎	平 77 (R82)	平 89 (R95)

※「𠄎 (77.272)」は第三字の後に「𠄎・ji<sup>1</sup>」(平 30 (R31))“言う”が続く。同字は「(何某を平声で言う)」という意味を持ち、具体的な字音の指示機能はないと考えられる。

表1において、「𠄎 (20.161) gjwii<sup>1</sup>」と「𠄎 (20.162) gjwii<sup>1</sup>」のように、同一の反切を共有している複数の字は、同一の小韻に属する同音字である。

反切下字に平声字をとる表1最後の3小韻に「𠄎」“平”を記すことは明らかに不自然である。一方、「𠄎」“平”を第三字に取る大多数の例で、反切下字は実際に上声韻に属しており、「𠄎」“平”が調類を指示する働きを持つこと自体は確実なようである。

もう一つの問題は、反切の第三字に「𠄎」“上”を持つ小韻が『文海』甲種本に、以下の通り5つ存在することである(「雑類」の例は除外)。すなわち、この5例は平声巻の掲載字に対し、上声への読み替えを指示しているのである。この行為は韻

書に分韻の論理に反している<sup>8</sup>：

表2 第三字に「𪛗」「上」を持つ反切の事例

反切帰字	反切帰字の韻目	反切上字	反切下字	第三字	反切上字の韻目	反切下字の韻目
𪛗 (41.132) wəə <sup>1</sup>	平 31 (R32)	𪛗 wee <sup>1</sup>	𪛗 phəə <sup>1</sup>	𪛗	平 12 (R12)	平 31 (R32)
𪛗 (49.222) bicej <sup>1</sup>	平 38 (R39)	𪛗 bji <sup>2</sup>	𪛗 kicej <sup>1</sup>	𪛗	上 10 (R11)	平 38 (R39)
𪛗 (49.231) bicej <sup>1</sup>						
𪛗 (55.221) ljwo <sup>1</sup>	平 48 (R50)	𪛗 lj <sup>1</sup>	𪛗 tsjwo <sup>1</sup>	𪛗	平 29 (R30)	平 48 (R50)
𪛗 (83.112) tsier <sup>1</sup>	平 78 (R83)	𪛗 tsji <sup>2</sup>	𪛗 zier <sup>1</sup>	𪛗	上 61 (R72) <sup>9</sup>	平 78 (R83)
𪛗 (89.253) tsjwir <sup>1</sup>	平 86 (R92)	𪛗 tsji <sup>2</sup>	𪛗 <sup>?</sup> (史) tswər <sup>2</sup> 𪛗 (賈) zjir <sup>1</sup> 𪛗 (韓) mjir <sup>1</sup>	𪛗	上 10 (R11)	上 76 (R90) 平 86 (R92) 平 86 (R92)

なお、最終行の「𪛗 (89.253) tsjwir<sup>1</sup>」は、先行研究の間で反切下字の字種の同定結果が相違している。史金波 et al. (1983: 305) は疑問符つきで「𪛗 (② 46A1.2) tswər<sup>2</sup>」を、賈常業 (2019: 129) は「𪛗 (89.241) zjir<sup>1</sup>」を、韓小忙 (2021: vol. 3, p. 418) は「𪛗 (88.211) mjir<sup>1</sup>」を、それぞれ反切下字と見なす。参考までに「𪛗 (89.253) tsjwir<sup>1</sup>」の反切「𪛗𪛗𪛗」の影印を示す。やはり、反切下字は史金波 et al. (1983) の同定する通り「𪛗 (② 46A1.2) tswər<sup>2</sup>」であるように見える。しかし「𪛗 (② 46A1.2) tswər<sup>2</sup>」は上 76 (R90) の所属字であり、R92 に属する「𪛗 (89.253) tsjwir<sup>1</sup>」の反切下字と考えるのはやや苦しい。誤刻と考えるのが妥当であろう。恐らく賈常業 (2019) も韓小忙 (2021) も同様に推論した結果、「𪛗 (② 46A1.2) tswər<sup>2</sup>」と字形の似た字を平声第 86 韻の中から探し出したのであろう。本論文もまた、原文が「𪛗 (② 46A1.2) tswər<sup>2</sup>」であることを承認しつつ、これを誤りと見る賈常業 (2019) と韓小忙 (2021) の両説に同意する。両説の正閏については暫時判断を保留したい。

<sup>8</sup> 聂鸿音 (2015: 71) は声調を跨いだ反切の繋聯の原因を、声調が西夏人にとって厳密な注意の対象となっていないためと考えており、『同音』旧版が、異なる声調の同声同韻字を同一の小類に帰属せしめていた事実をその証左とする。しかし、たとえ西夏人が声調について厳密な処理を行っていなかったとしても、平声卷の掲載字を「上声で読め」と指示する理由の説明にはならない。

<sup>9</sup> 李范文 (2012: 287)、賈常業 (2019: 348)、韓小忙 (2021: vol. 1, p. 604) は上 61 (R72) とするが、Кычанов et al. (2006: 407) は調類・韻類未詳とする。李范文 (2006: 463) は同字を「𪛗 ne<sup>1</sup>」(平 65 (R68)) と読んだうえで、「𪛗 ne<sup>1</sup>」が上 61 (R72) に含まれている理由は不明としている。同字を多くの先行研究が上声第 61 韻の所属字と見なす根拠は、『文海』乙種本、丙種本が記す上 61 (R72) の第 1 字であると考えられる。この字は乙種本と丙種本とで字形に相違があり、乙種本では漢字の偏に相当する筆画が「𪛗 tsji<sup>2</sup>」と異なっている。本論文では乙種本で誤写が発生したと考え、「𪛗 tsji<sup>2</sup>」を採用。



図1 「襪 tsjwir<sup>1</sup>」の反切（俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所 et al. 1997: 164）

字種の問題はともかく、平声字を収める巻で上声への読み替え指示が行われていることは確かである。入れ子構造で字音を類別する「分韻の論理」と、字音同士の部分的相同性に基づき間接的に類を示す「反切の論理」とが、一冊の文献の中で撞着しているのである。

さて、表2の5例のうち、平86 (R92)を除く4例の韻目、すなわち平31 (R32)、平38 (R39)、平48 (R50)、平78 (R83)には共通点がある。それは、反切帰字・反切下字の所属韻目が、対応する上声韻を持たないことである。この4例の反切は当該の反切帰字を、存在しないはずの韻目の字音として読むことを指示しているのである。

西夏語音韻学は、各字の調類を精密に明記することよりもむしろ、平声韻と上声韻との間で量的不均衡が発生することを避けるために、韻目を合併したと考えられる。すなわち、互に対応関係にある平声韻と上声韻との間で、一方が他方に比して小韻数が大きくなることを避けるために、少数派の韻目の所属字を全て多数派の韻目に収録し、それによって本来存在するはずの韻目を「欠番」にするという方法を採用したのである。

韻目の合併という現象自体は、『広韻』の冬韻上声など、漢語音韻学でもしばしば見られる<sup>10</sup>。注目すべきは、西夏語音韻学の欠番韻目が、漢語音韻学のように分節音の近い同調の韻目間で起きているのではなく、分節音を同じくする異調の韻目間で起きていることである。漢語音韻学の韻書には実に様々な種類の韻書が存在する。それにもかかわらず、調類を跨いだ類の統合は試みられなかった。異調の韻目間の合流は、漢語音韻学の方法を踏襲したものでは決してなく、西夏語音韻学の独創と見なせる。

<sup>10</sup> 『広韻』は、平声の2番目の韻目「冬韻」と対応する上声の韻目を設けていない。しかし実際には「冬韻」と調類のみを異にする上声字が存在する。上声の2番目の韻目「腫韻」（平声の3番目の韻目「鍾韻」に対応）の中に「冬韻上声」の小韻が2つ紛れているのである。この混入は意図的であり、1つ目の小韻（「漣」1字）は反切「都鵠切」を示し、「漣」の注で「此是冬字上声」「この字は「冬」という字の上声である」と明言する。しかしもう1つ目の小韻（「鵠・臆」2字）は反切「莫漣切」を示すだけで、自身が「冬韻」の上声であることを明言しない。

この独創の背景を考えるうえで、荒川（2014: 70）の脚注 10 の記述は示唆に富む。同書は、漢語音韻学は韻文の作成、特に押韻という実用的用途と深く関わっていた一方で、西夏語において韻文の脚韻は一般的なものといえず、従って西夏語音韻学は漢語音韻学と違って、純然たる音韻分析と文字配列を意識した学術性の高い存在であったと述べる。西夏語音韻学の設計性の強さ、ならびに、韻文に統一的規範を設ける必要性がなかったことが、調類を跨いだ韻目の合併という現象が起きる可能性を西夏語音韻学にもたらしたといえよう<sup>11</sup>。

このほか、平声巻の字が自らの調類を上声であると告白する場合がある。それは義注（見出し字の字義などを説明する字句）の末尾で「𦉳𦉳𦉳𦉳（𦉳）」“上声である”或いは類似の表現を記す事例である。かかる例には以下の 13 字がある<sup>12</sup>：

表 3 調類が上声である旨が義注に記された字

反切帰字	反切帰字の韻目	反切上字	反切下字	第三字	反切上字の韻目	反切下字の韻目	義注末尾の字句
𦉳 (19.161) <i>zice</i> <sup>1</sup>	平 13 (R13)	𦉳 <i>zjwu</i> <sup>2</sup>	𦉳 <i>sice</i> <sup>1</sup>	—	上 2 (R2)	平 13 (R13)	𦉳𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (41.132) <i>wəə</i> <sup>1</sup>	平 31 (R32)	𦉳 <i>wec</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>phəə</i> <sup>1</sup>	𦉳	平 12 (R12)	平 31 (R32)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (41.141) <i>dwəə</i> <sup>1</sup>	平 31 (R32)	𦉳 <i>duu</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>wəə</i> <sup>1</sup>	—	平 5 (R5)	平 31 (R32)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (49.222) <i>bicej</i> <sup>1</sup>	平 38 (R39)	𦉳 <i>bji</i> <sup>2</sup>	𦉳 <i>kicej</i> <sup>1</sup>	𦉳	上 10 (R11)	平 38 (R39)	𦉳𦉳𦉳 “上(声)で言う”
𦉳 (49.231) <i>bicej</i> <sup>1</sup>							𦉳𦉳𦉳 “上(声)で言う”
𦉳 (50.241) <i>dəj</i> <sup>1</sup>	平 40 (R41)	𦉳 <i>du</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>tsəj</i> <sup>1</sup>	—	平 4 (R4)	平 40 (R41)	𦉳𦉳𦉳 “上声。二”
𦉳 (50.242) <i>dəj</i> <sup>1</sup>	平 40 (R41)						—
𦉳 (55.221) <i>ljwo</i> <sup>1</sup>	平 48 (R50)	𦉳 <i>lj</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>tšjwo</i> <sup>1</sup>	𦉳	平 29 (R30)	平 48 (R50)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (82.252) <i>wier</i> <sup>1</sup>	平 78 (R83)	𦉳 <i>wjijr</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>tsier</i> <sup>1</sup>	—	平 74 (R79)	平 78 (R83)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (83.112) <i>tsier</i> <sup>1</sup>	平 78 (R83)	𦉳 <i>tšij</i> <sup>2</sup>	𦉳 <i>zier</i> <sup>1</sup>	𦉳	上 61 (R72)	平 78 (R83)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (86.262) <i>gaar</i> <sup>1</sup>	平 83 (R88)	𦉳 <i>giuu</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>saar</i> <sup>1</sup>	—	平 7 (R7)	平 83 (R88)	𦉳𦉳𦉳 “上(声)で言う”
𦉳 (92.231) <i>koor</i> <sup>1</sup>	平 94 (R102)	𦉳 <i>kjir</i> <sup>2</sup>	𦉳 <i>goor</i> <sup>1</sup>	—	上 72 (R84)	平 94 (R102)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”
𦉳 (92.241) <i>goor</i> <sup>1</sup>	平 94 (R102)	𦉳 <i>gji</i> <sup>1</sup>	𦉳 <i>koor</i> <sup>1</sup>	—	平 11 (R11)	平 94 (R102)	𦉳𦉳𦉳 “上声である”

<sup>11</sup> 本論文が異調間での合併現象を提起する意義は、単に西夏語音韻学の特異性を明らかにすることにとどまらない。西夏語の形態論は、調類の交代としばしば関連付けて論ぜられている（Gong 2003: 606）。『文海』が個別の字の調類を同定するための最重要資料の一つである以上、『文海』が示す調類を額面通り受け取ることができない可能性がつきまとうという仮説は、様々な言語現象の考察に影響を及ぼすこともあり得る。

<sup>12</sup> 「𦉳 *qwu*<sup>2</sup>」はコンピュータ動詞である。「𦉳 *lj*<sup>1</sup>」はここでは、断定の機能を持つ文末助詞であり、漢文（古典中国語）の「也」に相当する。

「𐽳 (50.242)  $dj^1$ 」自身の義注には上声に関する表現は現れないが、その同音字である「𐽳 (50.241)  $dj^1$ 」が「𐽳龍桶”上声。二”という義注を持つ。すなわち、自分と自分の同音字である全2個の字が全て上声で読まれることを述べている<sup>13</sup>。

前述の通り、表3に現れた反切下字の韻目（平13 (R13), 平31 (R32), 平38 (R39), 平40 (R41), 平48 (R50), 平78 (R83), 平83 (R88), 平94 (R102)）は、すべて対応する上声韻を持たない。表2のように反切が上声への読み換えを指示する場合も、表3のように義注が調類を明言する場合も、平86 (R92)「𐽳 (89.253)  $tsjw^1$ 」を例外として、存在しないはずの上声韻で読むよう指定をしている。また、反切が上声を指定する表2の全5例のうち平86 (R92)「𐽳 (89.253)  $tsjw^1$ 」を除く4例が、義注でも上声での指定を指示している。反切第三字が上声を示す字も、義注が上声を指定する字も、実際に上声字である蓋然性が高い。

それでは、残る1例の平86 (R92)は、なぜ上77 (R92)という対応する上声韻を持ちながら、偽平声の字を含んでいるのであろうか。それは恐らく、韻目の内部構造とその音韻的处理の方法に関連していると考えられる。実際に平86 (R92)と上77 (R92)の小韻をそれぞれ羅列すると、西夏語の声母を9分する「品」の序列に従って並んでいることが分かる<sup>14</sup>：

<sup>13</sup>「調類名+数詞」という形の注を持つ例は『文海』中に他に見られない。ただ、字音に関する記述の直後に数字を記して、当該の字音を持つ字の数を示す方法は、漢語音韻学では珍しくない。実際にこの小韻の字数は2であり、注の内容と矛盾していない。

<sup>14</sup>各品は更に2～5の声類に分けられ、合計36に分かれる。ただ、これは漢語音韻学の所謂「三十六字母」の機械的模倣と考えられる。たとえば西夏語音韻学において滂母（漢語音韻学の滂母は無声有気両唇破裂音に対応）と並母（漢語音韻学の並母は有声両唇破裂音に対応）は、別個のカテゴリとして存在していたものの、実際の言語音上の差異はなかったと多くの先行研究が考えている。従って、とある字の声母が  $ph-$  と考えられたとしても、それが当時の西夏語音韻学において滂母と並母のどちらに属していたかは自明でない。逆に、例えば西夏語音韻学における明母（漢語音韻学の明母は両唇鼻音に対応）は  $m-$  と  $b-$  の両方に対応していたと考えられている。西夏語音韻学の声母の分類単位と実際の西夏語の声母との間には、一対一の関係が成り立っていなかったといえる。

表 4 平声第 86 韻と上声第 77 韻の小韻の排列順

平声 86 韻	小韻	品	上声 77 韻	小韻	品	
𩇛 (88.211) mjir <sup>1</sup>	1	I	𩇛 mjir <sup>2</sup>	1	I	
𩇜 (88.221) mjir <sup>1</sup>			𩇜 njir <sup>2</sup>	2	V	
𩇝 (88.222) mjir <sup>1</sup>			𩇝 ·jir <sup>2</sup>	3	VIII	
𩇞 (88.231) bjir <sup>1</sup>	𩇞 ·jir <sup>2</sup>					
𩇟 (88.232) kjir <sup>1</sup>	𩇟 ·jir <sup>2</sup>					
𩇠 (88.241) tsjir <sup>1</sup>	4	VII	𩇡 njir <sup>2</sup>	4	V	
𩇢 (88.251) sjir <sup>1</sup>	5	VII	𩇣 djir <sup>2</sup>	5	III	
𩇤 (88.252) ·jir <sup>1</sup>	6	VIII	𩇤 djir <sup>2</sup>			
𩇥 (88.261) pjir <sup>1</sup>	7	I	𩇥 djir <sup>2</sup>			
𩇦 (88.262) gjwir <sup>1</sup>	8	V	𩇧 djir <sup>2</sup>	6	III	
𩇨 (88.263) tsjwir <sup>1</sup>	9	VII	𩇩 tsjir <sup>2</sup>	7	VII	
𩇪 (88.271) tsjwir <sup>1</sup>			𩇪 ·jir <sup>2</sup>	8	VIII	
𩇬 (89.111) sjwir <sup>1</sup>	10	VII	𩇭 rjir <sup>2</sup>	9	IX	
𩇮 (89.112) ·jwir <sup>1</sup>	11	VIII	𩇮 rjir <sup>2</sup>			
𩇯 (89.121) ·jwir <sup>1</sup>			𩇯 rjir <sup>2</sup>			
𩇱 (89.122) zjwir <sup>1</sup>	12	IX	𩇱 rjir <sup>2</sup>			
𩇳 (89.131) tjir <sup>1</sup>	13	III	𩇳 rjir <sup>2</sup>			
𩇴 (89.132) tjir <sup>1</sup>			𩇴 rjir <sup>2</sup>			
𩇶 (89.141) tshjir <sup>1</sup>	14	VI	𩇶 rjir <sup>2</sup>			
𩇸 (89.142) sjir <sup>1</sup>	15	VI	𩇸 rjir <sup>2</sup>			
𩇺 (89.151) xjir <sup>1</sup>	16	VIII	𩇺 zjir <sup>2</sup>	10	IX	
… (小韻計 9 字) xjir <sup>1</sup>			𩇺 ·jwir <sup>2</sup>	11	VIII	
𩇼 (89.222) gjwir <sup>1</sup>	17	V	𩇽 tshjwir <sup>2</sup>	12	VII	
𩇾 (89.231) rjir <sup>1</sup>	18	IX	𩇿 gjwir <sup>2</sup>	13	V	
𩇿 (89.232) rjir <sup>1</sup>			𩇿 gjwir <sup>2</sup>			
𩇿 (89.241) zjir <sup>1</sup>	19	IX				
𩇿 (89.251) zjir <sup>1</sup>						
𩇿 (89.252) zjir <sup>1</sup>						
𩇿 (89.253) tsjwir <sup>1</sup>	20	VI				

※慣例に従い、品の番号はローマ数字で表した。上 77 の小韻の排列状況および小韻の区分状況は、『文海』乙種本・丙種本および『同音』新旧両系統の諸本を参考に復元した。『文海』乙種本・丙種本の校合には李范文 (2006)、韩小忙 (2006) を参照した。

平 86 は、聂鸿音 (1998) が言う「重韻」、すなわち一つの韻目内に異なる韻母が併存する現象ゆえに、第一品から第九品までの循環が 5 つ見られる。上 77 は、循環が 6 つ見られる。上 77 に『文海』が与えた反切を知り得ぬ今、正確な論証は叶わないが、数多くの韻母が上 77 に雑居していたため、特に韻目の後半で循環らし

い循環が成立していない状態が生じたと思像できる<sup>15</sup>。本論文では一つの可能性として、上 77 が持つ何らかの雑多な性質を解消するために、一部の小韻の所属が平 86 に変更せられたという仮説を挙げておく。

本節の以上の議論で、「偽平声」が存在すると考えられること、そして「偽平声」の存在を仮定することで、調類を超えた韻目の合併により「欠番韻目」が生じた蓋然性が高いことが明らかとなった。ところが、「偽平声」および「欠番韻目」の発見は、より一層複雑な問題を我々に突き付ける。それは、「偽平声」の可能性の蔓延である。

## 2.2. 「偽平声」の可能性の蔓延：反切の前提への疑い

ここで再び反切第三字の「𐰽」“平”の議論に立ち返りたい。3 例とわずかながら、平声字であるはずの反切下字に対して「𐰽」“平”が附与せられる反切が存在した(表 1 を参照)。平 31 (R31) の小韻同士の反切下字の繋聯状況を見てみると、韻目内部で反切下字の繋聯が途切れていることがわかる(「A ⇒ B」は、小韻 A に属する反切母字が小韻 B に属する反切用字を持つことを指す。「A ⇔ B」は、「A ⇒ B」かつ「B ⇒ A」であることを指す。偽平声の小韻には灰色で着色している)：

第 4 小韻 ⇒ 第 6 小韻  
第 8 小韻 ⇒ 第 6 小韻  
第 3 小韻 ⇒ 第 5 小韻 ⇒ 第 1 小韻 ⇒ 第 2 小韻 ⇔ 第 6 小韻  
第 7 小韻 ⇒ 第 5 小韻  
////////////////////  
第 12 小韻 ⇒ 第 10 小韻 ⇒ 第 9 小韻 (⇒ 第 1 小韻 + 𐰽 “上 (声)”)  
////////////////////  
第 11 小韻 (⇒ 第 10 小韻 + 𐰽 “平 (声)”)

全 12 個の小韻のうち、第 9 小韻 (𐰽 41.132 wɔɔ<sup>1</sup>) と第 10 小韻 (𐰽 41.141 dwɔɔ<sup>1</sup>) が偽平声とすでに判明している。第 1～8 小韻は互いに繋聯する一方で、第 9・10・12 小韻については、第 9 小韻が第 1 小韻の字を反切下字に持ったうえで第三字「𐰽」“上”を伴って初めて反切がつながった状態であり、厳密な意味での繋聯が成立していない。この事実は第 12 小韻もが実は偽平声なのではないかという推測を可能ならしめる。

この例より、偽平声の字には、反切第三字が読み換えを指示しながら義注は沈黙している場合と、義注が調類を明言しながら反切が第三字を持たない場合、反切と義注の両方が上声を指示する場合に加えて、反切も義注も調類について沈黙してい

<sup>15</sup> 『同音文海宝韻合編』が上 77 (R92) の 4 小韻に対して与えた反切は、それぞれ、第 2 小韻「𐰽 gjur<sup>1</sup> 𐰽 jr<sup>2</sup>」, 第 3 小韻「𐰽 jr<sup>1</sup> 𐰽 jr<sup>2</sup>」, 第 4 小韻「𐰽 gur<sup>1</sup> 𐰽 tshjwr<sup>2</sup>」, 第 9 小韻「𐰽 jr<sup>1</sup> 𐰽 djr<sup>2</sup>」(韓小忙 2008: 135; 138; 173; 198)。

る第4の場合もあるという可能性が浮上する。問題は、この第4の場合を我々が過不足なく把握する方法が存在するかということである。実際、表1で第三字「𠵽」“平”を伴う第二の例が見られる平58 (R61)の繋聯状況は、各小韻の調類について疑念を抱かせるものとなっている：

第3小韻⇒第1小韻⇒第2小韻⇔第5小韻  
 第4小韻⇒第1小韻  
 第11小韻⇒第1小韻  
 ///  
 第6小韻⇔第9小韻  
 第7小韻⇒第9小韻  
 第8小韻⇒第9小韻  
 ///  
 第10小韻 (⇒第11小韻+𠵽“平(声)”)  
 ///  
 第12小韻⇔第13小韻

表1の第二の例の反切下字「𠵽 (63.252) lu<sup>1</sup>」が属する第11小韻は、第1～5小韻と繋聯する。反切下字が反切母字の調値を示すのならば、第1～5小韻もまた偽平声であることになる。全13個のうち約半分の6個が上51 (R61)から合流してきたというのは不自然である。

偽平声の疑いが韻目内に蔓延する現象は、第4の場合に限らない。義注が調類を明言しながら反切が第三字を持たない例「𠵽 (19.161) zice<sup>1</sup>」(平13 (R13)の第5小韻)の場合、最終的には平声第13韻 (R13)の第1～第6小韻全てが互いに反切下字で繋聯し、全ての字の真の調類は上声ということになってしまう。もし仮にこれが真実ならば、そもそも平13 (R13)を平声韻と見なす理由はないはずである：

第6小韻⇒第1小韻⇒第4小韻⇔第3小韻  
 第2小韻⇒第4小韻  
 第5小韻⇒第4小韻

ところで、各韻目は序数で表されるほか、「代表字」を以て呼ぶこともできる。例えば平13 (R13)は「緜 (19.151) siee<sup>1</sup>」(平13第4小韻)を代表字とする。西夏語音韻学における平13 (R13)の名は「緜韻」であり、「緜 (19.151)」こそが平13 (R13)所属字の中で最も平声字であることが確からしい字のはずである<sup>16</sup>。ところが、偽平声である「𠵽 (19.161) zice<sup>1</sup>」は、平13 (R13)の代表字「緜 (19.151)」と反切下字で直接的に繋聯している。そのため「緜 (19.151)」も偽平声である可能性が生ずる。韻目の代表字に偽平声の疑いが生じているという事実は、「平13 (R13)の全小韻が

<sup>16</sup> ただし、韻目の代表字にも調類に疑いを差し挟み得る例がある (濱田 2022b)。

反切下字で互いに繋聯すること自体が誤りである」(反切に誤刻がある)か、「反切帰字の調類は反切下字のみが指定するという前提が誤りである」か、どちらかの可能性を想像せしめる。しかし、どちらも立証困難である。反切の誤刻の立証には資料が足りない。反切帰字の声調を反切下字のみが指示することを否定するならば、反切上字が反切帰字の調類の情報を提供する場合があることを認めることになる。しかし『文海』甲種本の本体部分の全小韻のうち、約1割の反切の反切上字が卷二の所収字と考えられる<sup>17</sup>。これら全てを偽平声と考えるのは無理がある。そもそも、反切下字が明らかに上声巻収録字であるにもかかわらず、第三字「𠵽」「平」を取らない反切が、表5の通り、『文海』甲種本の本体中に11例確認できる。但し「𠵽(90.211), 𠵽(90.221)」「平87(R93)。ともに dewr<sup>1</sup>」の反切下字「𠵽(②43B1.3) lhiq<sup>2</sup>」(上59(R69))は「𠵽(90.162) rewr<sup>1</sup>」「平87(R93)」の誤刻である蓋然性が高い(史金波 et al. 1983: 361, 賈常业 2019: 639)。この例を除外するならば全10例である。また、「𠵽(61.112) zow<sup>1</sup>」(平54(R56))は反切下字「𠵽(②33A3.9) we<sup>2</sup>」が上7(R8)であり、平54(R56)と上7(R8)は声調が異なる以前に、分節音の違いが大きく、誤刻を疑うに値する事例である。しかし先行研究は代わるべき字を提案しておらず、本論文もまた適当な修訂案を持ち合わせない。このほか、「𠵽(78.111) wq<sup>1</sup>」(平70(R73))は第三字として「𠵽 niqj<sup>1</sup>」「濁」を持っており、他の例と同等に扱うことができない可能性がある。もし「𠵽(61.112) zow<sup>1</sup>」(平54(R56))と「𠵽(78.111)・wq<sup>1</sup>」(平70(R73))も除外すると、検討対象の小韻は8例となる：

<sup>17</sup>『文海』甲種本は第45頁裏と第46頁表裏、第47頁表を欠くため、小韻数や反切上字の割合は概数である。

表5 上声字を反切下字に持ち、反切第三字に「𠄎」「平」を持たない例

反切帰字	反切帰字 の韻目	反切上字	反切下字	反切上字の韻目	反切下字の韻目
𠄎 (35.263) $\acute{s}i\omega^1$ 𠄎 (35.271) $\acute{s}i\omega^1$	平 28 (R29)	𠄎 $\acute{s}i\omega^1$	𠄎 $\acute{s}i\omega^2$	平 9 (R9)	上 26 (R29)
𠄎 (61.212) $\acute{y}i\omega^1$	平 55 (R57)	𠄎 $\acute{y}i\epsilon^1$	𠄎 $ki\omega^2$	平 9 (R9)	上 48 (R57)
𠄎 (74.131) $\acute{l}j\omega^1$	平 67 (R70)	𠄎 $l\omega^1$	𠄎 $zj\omega^2$	平 58 (R61)	上 60 (R70)
𠄎 (87.152) $\acute{\eta}ar^1$ 𠄎 (87.131) $\acute{\eta}ar^1$	平 84 (R90)	𠄎 $\acute{\eta}wer^2$	𠄎 $l\omega r^2$	上 71 (R82)	上 76 (R90)
𠄎 (88.131) $\acute{t}sw\acute{\omega}^1$ 𠄎 (88.132) $\acute{t}sw\acute{\omega}^1$	平 84 (R90)	𠄎 $\acute{t}sjj^2$	𠄎 $l\omega r^2$	上 10 (R11)	上 76 (R90)
𠄎 (90.222) $\acute{k}ji\omega r^1$ 𠄎 (90.231) $\acute{k}ji\omega r^1$ 𠄎 (90.232) $\acute{k}ji\omega r^1$ 𠄎 (90.241) $\acute{k}ji\omega r^1$	平 88 (R94)	𠄎 $\acute{k}ju^1$	𠄎 $\acute{y}ji\omega^2$	平 59 (R62)	上 40 (R46)
𠄎 (90.261) $\acute{k}or^1$ 𠄎 (90.262) $\acute{k}or^1$	平 89 (R95)	𠄎 $\acute{k}i\epsilon^1$	𠄎 $\acute{y}or^2$	平 66 (R69)	上 80 (R95)
𠄎 (91.211) $\acute{k}owr^1$	平 91 (R97)	𠄎 $\acute{k}ar^2$	𠄎 $\cdot\omega^2$	上 73 (R85) ? <sup>18</sup>	上 47 (R56)
𠄎 (61.112) $\acute{z}ow^1$	平 54 (R56)	𠄎 $\acute{z}j^1$	𠄎 [sic] $\acute{w}e^2$	平 69 (R72)	上 7 (R8)
𠄎 (78.111) $\cdot\omega^1$	平 70 (R73)	𠄎 $\acute{w}\omega^1$	𠄎 $l\omega^2$ + 𠄎 “濁”	平 58 (R61)	上 62 (R73)
𠄎 (90.211) $\acute{d}ewr^1$ 𠄎 (90.221) $\acute{d}ewr^1$	平 87 (R93)	𠄎 $\acute{d}j\omega^1$	𠄎 $\acute{r}ewr^1$ (𠄎 $l\acute{h}i\epsilon^2$ )	平 3 (R3)	𠄎: 平 87 (R93) 𠄎: 上 59 (R69)

表5の8例は何れも、反切帰字と反切下字とで通韻番号が一致している。反切帰字が偽平声である可能性とともに、反切下字が「偽上声」（非上声字が西夏語音韻学の資料によって、反切以外の方法で「上声字」と定義せられる現象、またはそのような字）である可能性を検討する必要が生ずる。しかし、『文海』甲種本の巻二が失われている以上、偽上声の字の特定は困難である。また、「反切下字の情報のみが反切帰字の調類を決定する」という原則を放棄して、「反切上字も反切帰字の調類に対して情報を与え得ることを認める」という大きな譲歩をしたとしても、問題は解決しない。なぜならば、反切上字と反切下字のどちらも上声字である平声字の例が存在しているからである。そもそも、「偽平声の存在」という仮説それ自体が、反切帰字と反切下字の関係を前提としてはじめて導き出し得たものである。

かといって、この矛盾を理由として偽平声の存在を簡単に否定することもできない。なぜならば、『文海』甲種本自身が「この字は上声である」という注で偽平声の字の存在を証言しているからである。我々はここにおいて、偽平声の可能性が過

<sup>18</sup>「𠄎  $\acute{k}ar^2$ 」は『同音文海宝韻合編』から上 73 (R85) と知れる（韓小忙 2008: 132）。しかし『文海』乙種本も丙種本も同字を収録していない。

度に拡大してしまうという異常な推論結果と、推論の棄却自体が不可能であることとの間で、板挟みになってしまうのである<sup>19</sup>。

それでは我々は『文海』を、条理を欠いた文献と見なさざるを得ないのであろうか。そうではない。偽平声が生じたことも、偽平声が現代人によって発見できたことも、どちらも「分韻の論理」と「反切の論理」が厳然として存在しつつも、両者が同一でないためであった。西夏語音韻学が持つ「分韻の論理」と「反切の論理」が異なる結論を導き出す理由は、方法間の表面的相違だけでなく、それぞれの依って立つ前提そのものの相違にも求められよう。『文海』所収の反切は、その分韻行為に先立ち、あるいは分韻行為とは独立に設計せられたのではないか、という仮説をここで立てることができる。

### 3. 西夏語音韻学を相対化する手続き

#### 3.1. 「西夏語音韻学」は唯一無二か

1.2.3. で提起したように、Софронов et al. (1964: 34-35) は西夏語音韻学の文献の間で声調に対する考え方、あるいは声調の扱い方に相違があると考えた。ただ、同書の「音声学的 vs. 音韻論的」という言葉を字面通り受け止めることは適当ではなかろう。現代的な意味での「音韻論的」な分析が宋・西夏の当時に行われていたとは考えられず、恐らく Софронов et al. (1964) 自身もそうは考えていなかったはずである。「音声学的・音韻論的」といった表現は、一種の修辞と受け止めるべきであらう。では、この修辞の本意とは何であろうか。

西夏語音韻学のような複雑な体系が一朝一夕で完成することはあり得ない。現代人が出土資料から帰納できる、すでに完成した姿を持つ西夏語音韻学は、西夏語音韻学の誕生から一定の時間を経た後のものと考えるのが自然である。「2つの調類のみから成る 105 の通韻という枠組みの中で、西夏文字の字音を秩序立てることができる」という考え方は、西夏時代当時の（もはや特定する術がない）多くの音韻学者が生み出した理論的構築物であり、西夏語音韻学の萌芽した当初から所与のものとして存在したものでなかったと考えられる。Софронов et al. (1964) は恐らく、「西夏語音韻学は時間を経るとともに、現代の音韻論の観点から見て正確なものになっていった」と主張したかったわけではなく、字音を分析するための枠組みが、より整備されている（より後期の）段階と、整備が進んでいない（より早期の）段階とが存在していて、字音の分析結果が一定不変だったとは限らないと述べようとしたと想像できる。「音声学的か音韻論的か」という言葉は、西夏語音韻学の“洗練”

<sup>19</sup> 本論文で偽平声の可能性を積極的に指摘した、表 1 下 3 行の反切下字、表 2, 3, 5 の反切母字のうち、『同音文海宝韻合編』による調類の記載が残存しているものは「蕪 (41.132) wəw<sup>1</sup> 上平, 「茲 (82.252) wier<sup>1</sup> 平上, 「紆 (83.112) tsier<sup>1</sup> 平去, 「籛 (86.262) gaar<sup>1</sup> 平, 「兪 (92.231) koor<sup>1</sup> 平, 「詰 (92.241) goor<sup>1</sup> 平, 「緘 (35.263) siwə<sup>1</sup>・緘 (35.271) siwə<sup>1</sup> 平去, 「糞 (87.152) ŋər<sup>1</sup>・糞 (87.131) ŋər<sup>1</sup> 平, 「緘 (90.261) kor<sup>1</sup>・熈 (90.262) kor<sup>1</sup> 平の 9 小韻のみである (韓小忙 2008: 75; 76; 122; 130; 134; 141; 145; 151; 170)。

の程度の違いという意味で捉えられよう。念のため補足しておくが、“洗練”とはもちろん、西夏人が思う所の望ましい形へと理論を深化することを意味しているのであって、我々現代人が常識とする“言語学的に正確な分析”への接近を意味しているとは限らない。

筆者もまた、西夏人は西夏語を捉える複数の条理を持っていた蓋然性が高いと考える。西夏の歴史上、字音に関する（少なくとも）2つの学理が存在しており、それが西夏語音韻学の発展過程において、一方が他方よりも西夏国内で一般的になったという仮説が立てられる。その最大の根拠は、『同音』の新旧2系統の間における、分韻方法の違いである。

1.2.1.2 で述べたように、『同音』の分類法は『文海』と大きく異なる。『同音』は、まず全ての西夏文字を9つの品に分ける。そのうえで、同音字同士を圏点で挟み込むことで、『文海』の小韻に相当する字の集まりである「小類」を表示し、その小類をひたすら羅列するという形式をとる。新版は編纂時に『文海』を参照したことを重校序で名言しており、旧版で看過せられていた声調の差異を小類の区別に反映する（西田 1981: 111）ほか、小類内の字順も『文海』に基づいて再整理していると考えられている（荒川 2014: 76）。

ただ、『同音』の旧版と新版の関係は単線的なものとは断ぜられない。「調類の対立に疎い、理論的に不完全な点を残す旧版」と「平声と上声の対立に留意するようになり、より精密になった新版」という単純な図式で両者の違いを捉え切れるわけではない。両系統を詳細に比べると、小類間で字の所属が移動したり、旧版で区別せられていた字同士が新版で同音字扱いになったりすることもある。このような小類の分合現象の原理については未詳だが、ともかく、『同音』は両系統間で、「何を無視し、何を無視しなかったか」に違いがあったことは確かである。そして恐らくそれは、「西夏語自身の通時的音変化」だけでは説明がつかない。なぜならば、先述の通り、小類の分け方の変化は複雑であり、その複雑な変化を十分に説明する規則的音変化を想定することは恐らく困難であろうからである<sup>20</sup>。

両系統間における方法論の違いは、恐らく根本にまで及んでいると考えられる。例えば、『同音』旧版にはわずかながら、『文海』「雑類」所収字と本体所収字を同一の小類に収めていると見られる事例が存在する一方で（『同音』旧版 17A47, 44A43, 54A52などを参照）、『同音』新版は「雑類」所収字と本体所収字を同一小類に混淆する例はない。ただし、「もし新版 37B48「𐽧 (75.262) ʃj」(平 69 (R72)) と 37B51「𐽧 dʒjw」(平声雑類)の間、39B12「𐽧 dʒjw」(上声雑類)と 39B13「𐽧 (35.161) tʃhio」(平 28 (R29))の間に圏点が存在していたならば」という条件つきではあるが、この2箇所の圏点の在不在は新版の諸本のうち、所謂乙種本でしか確か

<sup>20</sup> 『同音』の旧版と新版それぞれが依拠した学理との間の時間的距離を、具体的かつ明確に述べることは難しい。各系統の刊本が成立した絶対年代自体が明らかでなく、また、新旧『同音』の序や跋に見られる年号（1.2.1.2 参照）を、学理の成立時期と同一視することもできない。

めることができない。ただ、39B12と39B13の間に圈点が存在した蓋然性が極めて高いことは『同音文海宝韻合編』から実証できる(韓小忙 2008: 149)。また、上記の通り37B48と37B51は字音の差異が大きく、圈点の遺漏を推定することは自然である<sup>21</sup>。『同音』新版において「雑類」所収字と本体所収字の混淆現象は存在しないと考えて差し支えなからう。

### 3.2. 小韻未満の単位の可能性

『同音』両系統に載る2つの字の関係は「旧版でも新版でも同音字である」か「旧版でも新版でも同音字でない」か「旧版では同音字だが新版では同音字でない」か「旧版では同音字でないが新版では同音字である」かの、4つに1つである。この事實は、『同音』の両系統間の比較を通じ、最小の分韻の単位である小類をさらに細分できることを意味する。以下、この小類よりも小さな単位を便宜的に『『同音』における最小単位』と仮称する。

『文海』の小韻は必ずしもこの『『同音』における最小単位』とは一致しない。例えば、『同音』旧版の第1品の第1小類には「𪛗(②33B6.4) 𪛘(②33B6.6) 𪛙(②33B6.5) 𪛚(②33B6.7) 𪛛(②33B6.8) 𪛜(②33B6.9) 𪛝(16.242) 𪛞(②33B7.1) 𪛟(②33B7.2) 𪛠(16.221) 𪛡(16.222)」の11字が含まれる。それらのうち、『文海』甲種本で「𪛝(16.242) 𪛠(16.221) 𪛡(16.222)」の3字は平11(R11)に収められており、先行研究はおしなべてbj<sup>1</sup>という字音を推定している。残る8字「𪛗(②33B6.4) 𪛘(②33B6.6) 𪛙(②33B6.5) 𪛚(②33B6.7) 𪛛(②33B6.8) 𪛜(②33B6.9) 𪛞(②33B7.1) 𪛟(②33B7.2)」は、『文海』乙種本と丙種本から上10(R11)の所属字とわかり、これらの字に対してはbj<sup>2</sup>が推定音として与えられている。一方、『同音』新版の第1品の第1小類には「𪛗(②33B6.4) 𪛘(②33B6.5) 𪛙(②33B6.6) 𪛚(②33B6.7) 𪛛(②33B6.8) 𪛜(②33B6.9) 𪛞(②33B7.1) 𪛟(②33B7.2) 𪛠(②33B7.3) 𪛡(②33B7.4)」の10字(全て上10(R11))が、第2小類には「𪛠(16.221) 𪛡(16.222)」(全て平11(R11))の2字が、それぞれ含まれる。ところが『同音』新版の第1小類と第2小類の全ての所属字の集合は、『同音』旧版の第1小類の全ての所属字の集合と一致していない。「𪛝(16.242)」は『同音』新版の第3小類の所属字「𪛞(16.231) 𪛟(16.232) 𪛠(16.241) 𪛡(16.242) 𪛢(16.251) 𪛣(16.252) 𪛤(16.261)」の一つとなっている。また、「𪛠(②33B7.3) 𪛡(②33B7.4)」は『同音』旧版で第2小類の全所属字である。このように、『同音』旧版の第1～第3小類と新版の第1～第3小類との間には、以下の通り「多対多」の対応関係が見られるのである：

<sup>21</sup> 新版系の未公開の残頁(第37頁裏)の存在を景永時 et al. (2017) が報告する。しかし同論文の考察対象は紙背に書き込まれた注釈であり、印刷面に関する詳報はない。

表6 『同音』第1品における新旧両系統の小類の対応例

字	𦉳𦉴𦉵𦉶𦉷𦉸	𦉹	𦉺𦉻	𦉼𦉽𦉾𦉿𦊀𦊁𦊂	𦊃𦊄
『同音』旧品・小類	第1品 第3小類	第1品 第1小類			第1品 第2小類
『同音』新品・小類	第1品 第3小類	第1品 第2小類	第1品 第1小類		
『文海』甲韻目・小韻	平声第11韻 第7小韻	平声第11韻 第6小韻	(欠失)		
『文海』乙韻目	平声第11韻	平声第11韻	上声第10韻	上声第10韻	
推定音価	bj <sup>1</sup>			bj <sup>2</sup>	

※『文海』乙種本は小韻境界を明記しないことも多いため、小韻番号を記さない<sup>22</sup>。

もう一つ例を挙げる。第6品の字「𦉳 (06.212)」は『同音』旧版で独字、すなわち同音字を持たない字と見なされている。ところが『同音』新版では「𦉳 (06.212)」は「𦉴 (06.213)」と同一の小類に属している。一方「𦉴 (06.213)」は、『同音』旧版で「𦉵 (②31A5.3) 𦉶 (②31A5.5) 𦉷 (②31A5.4) 𦉸 (②31A6.1)」と同一の小類に属している。この例でもやはり新旧間で一対一対応が見られない：

表7 『同音』第6品における新旧両系統の小類の対応例

字	𦉳	𦉴	𦉵𦉶𦉷𦉸
『同音』旧品・小類	第6品独字	第6品第20小類	
『同音』新品・小類	第6品第25小類		第6品第24小類
『文海』甲韻目・小韻	平声第1韻第15小韻		(欠失)
『文海』乙韻目	平声第1韻		上声第1韻
推定音価	su <sup>1</sup>		su <sup>2</sup>

上記の例から、『同音』新版は単に『同音』旧版の分韻を精緻化しているわけではなく、『同音』の両系統は互いに異なる原理で小類を区分していたらしいことが窺われる。

『同音』旧版の一見不可解な分韻は、本論文の問題と無関係とは限らない。例えば上記の「𦉴 (06.212) su<sup>1</sup>・𦉵 (06.213) su<sup>1</sup>」の2字の字音の相違が、『文海』に断片的な形で反映せられている可能性がある。平17 (R17) 第15小韻「𦉶 (23.221) sa<sup>1</sup>, 𦉷 (23.222) sa<sup>1</sup>」と第16小韻「𦉸 (23.223) sa<sup>1</sup>」の反切を比較すると、その反切上字はそれぞれ「𦉵 (06.213) su<sup>1</sup>」と「𦉴 (06.212) su<sup>1</sup>」である。この両小韻は『文海』の「分韻の論理」から言えば当然ながら異なる字音であったはずである。それにもかかわらず、両小韻の反切は反切上字も反切下字もそれぞれ互いに繋聯しあっており、梶鴻音 (1998) が呼ぶ所の「重紐」の関係にある。この小韻の対に、わざわざ

<sup>22</sup> 但し「𦉴 (16.221) 𦉵 (16.222)」と「𦉶 (16.231) 𦉷 (16.232) 𦉸 (16.241) 𦉹 (16.251) 𦉺 (16.252) 𦉽 (16.261)」の間には、小韻境界を表す圏点を記している。一方、「𦉼 (②33B6.4) 𦉽 (②33B6.6) 𦉾 (②33B6.5) 𦉿 (②33B6.7) 𦊀 (②33B6.8) 𦊁 (②33B6.9) 𦊂 (②33B7.1) 𦊃 (②33B7.2)」と「𦊄 (②33B7.3) 𦊅 (②33B7.4)」の間には圏点が見られない。

同一小韻の字を使い分けるのは、果たして字音上の根拠があつてのことなのであろうか。それとも、恣意的な選択に過ぎないのであろうか。ちなみに、別の「重紐」の対である平 33 (R34) 第 22 小韻「𪛗 (44.122) swej<sup>1</sup>」と第 23 小韻「𪛘 (44.131) swej<sup>1</sup>」を比較すると、その反切上字はやはり同様にそれぞれ「𪛙 (06.213) su<sup>1</sup>」と「𪛚 (06.212) su<sup>1</sup>」である。『文海』で同一小韻に属しながら「『同音』における最小単位」を異にする字の対が、「重紐」の反切上字に使われる他例には、平 1 (R1) 第 13 小韻「𪛛 (06.162) tshu<sup>1</sup>」と第 14 小韻「𪛜 (06.171) tshu<sup>1</sup>、𪛝 (06.172) tshu<sup>1</sup>、𪛞 (06.211) tshu<sup>1</sup>」における、平 11 (R11) 第 15 小韻の「𪛟 (17.222) tshji<sup>1</sup>」と「𪛠 (17.223) tshji<sup>1</sup>」も挙げられる。しかし、『文海』における「重紐」の対に対して、『文海』でも同一小韻に属し「『同音』における最小単位」も同じくする字の対が反切上字に使われる例が存在しており、平 1 (R1) 第 2 小韻の「𪛡 (05.151) phu<sup>1</sup>」と「𪛢 (05.143) phu<sup>1</sup>」がそれぞれ平 17 (R17) 第 2 小韻「𪛣 (22.121) pha<sup>1</sup>、𪛤 (22.122) pha<sup>1</sup>」と第 3 小韻「𪛥 (22.131) pha<sup>1</sup>、𪛦 (22.132) pha<sup>1</sup>」に、そして同様にそれぞれ平 27 (R28) 第 2 小韻「𪛧 (33.131) pha<sup>1</sup>、𪛨 (33.132) pha<sup>1</sup>」と第 3 小韻「𪛩 (33.141) pha<sup>1</sup>、𪛪 (33.142) pha<sup>1</sup>、𪛫 (33.151) pha<sup>1</sup>」に使われている。従って目下、「『同音』における最小単位」の相違が『文海』の反切用字の選択を左右していると断言することはできない。

実際に『文海』甲種本本体の小韻を「『同音』における最小単位」に従い細分すると、その数は約 60 増加する。わずか 5% 程の増加ではあるが、この増加の事実が意味するのは、もし仮に『文海』の反切が依拠した理論が、『文海』の分韻が依拠した理論よりも古いもののだとしたら、現代人が現有の知識や方法に基づき『文海』から帰納できる字音と、反切の設計者の意図した字音との間に差異がある可能性が否定できず、そして差異が仮にあったとしても、その具体的な差異を推定することが現時点では困難だという、西夏文字の各字音や西夏語の音韻体系の復元における根本的問題の存在である。

西夏語学は、西夏語音韻学を相対化し、西夏語音韻学に対するより深い分析を可能ならしめるための方法を必要としている。その方法の一つには、韻書内部に観察される例外的現象を言語学的観点と学術史的観点の両方から検証することであると本論文は考える。

#### 4. 結語：学術史的観点からの接近の可能性

本論文は西夏語の音韻体系や西夏文字の字音に接近することの困難たる所以の明確化を試みた。近代的な記述報告などを作成するのは異なる方法で生み出された西夏語音韻学の諸資料を、西夏語研究の「出発点」から「目的地」へと捉え直す試みに、本論文の主旨は存する。

本論文は、西夏語には偽平声の字が存在することと、それらが上声の欠番韻目に所属していると考えられること、しかしその一方で、反切の原理原則を徹底しようとする、様々な字に対して偽平声の疑いが蔓延してしまうことを述べた。そのうえで本論文は、偽平声仮説の棄却も、反切に対する際限ない懐疑も、ともに完徹し

きれない現状が生じた原因を、西夏語音韻学の複層性に依らしめた。すなわち、『文海』という一冊の韻書の内部に、字音を表現するための複数の論理（分韻の論理と反切の論理）が共存しながらも内部で衝突を起こしている事実は、手続きの違いという単純な理由以外にも、それぞれが依って立つ西夏語音韻学の理論そのものが異なっているからではないか、という仮説を提示した。議論はなお発展途上とはいえ、上声の欠番韻目（具体的には少なくとも、平 13 (R13) -iee, 平 31 (R32) -əə, 平 38 (R39) -ieej, 平 40 (R41) -j, 平 48 (R50) -jwo, 平 78 (R83) -ier, 平 83 (R88) -aar, 平 94 (R102) -oor に対応する上声韻）の存在を主張することは现阶段でも可能であろう。

過去の資料から言語体系を復元するには、資料を生み出した方法論に対する深い理解が欠かせない。これは死語・死文字の研究において一層切実な問題である。西夏語の言語体系、特に音韻体系の精密な復元は、西夏語音韻学の思考法の探求という、学術史的視点を必要とする。当時の漢人が『広韻』の上声巻所収字の多くを、（漢語の通時的音変化の結果として）巻名に反し去声のように読んだり、異なる韻目の漢字を実際には同音で発音したりする様を、西夏人学者は自ら目撃したはずである。そして『広韻』の刊年の 1008 年（北宋大中祥符元年）から 30 年ほどで、『広韻』とは大きく異なる反切の体系を持つ『礼部韻略』や『集韻』が編まれたことを、直近の事実として知っていたはずである。西夏人が『文海』の編集時に、複数の論理を柔軟に併用したとしても不思議はない。

本論文の考察は反切第三字が調類を指示する事例を出発点とした。しかし『文海』の反切の論理自体に様々な未解明の点が残っている。分韻の論理と反切の論理は相互補完的に考察する必要がある。偽平声と欠番上声韻目の議論はその初歩としての試みである。

## 参考文献

- 荒川慎太郎 (1997) 「西夏語通韻字典」『言語学研究』16: 1-151.  
 荒川慎太郎 (1999) 「夏藏対音資料からみた西夏語の声調」『言語学研究』17-18: 27-44.  
 荒川慎太郎 (2014) 『西夏文金剛經の研究』京都：松香堂。  
 荒川慎太郎 (2018) 「西夏文字における、いくつかの左下要素の筆画について」『日本言語学会第 157 回大会予稿集』442-447。  
 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所・中國社會科學院民族研究所・上海古籍出版社（編）(1996) 《俄藏黑水城文獻》卷 1。上海：上海古籍出版社。  
 俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所・中國社會科學院民族研究所・上海古籍出版社（編）(1997) 《俄藏黑水城文獻》卷 7。上海：上海古籍出版社。  
 Gong, Hwang-chenrg (2003) Tangut. In: Randy J. LaPolla and Graham Thurgood (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 602-620. London & New York: Routledge.  
 Gong, Xun (2021) Nasal Preinitials in Tangut Phonology. *Archiv orientální* 89: 443-482.  
 濱田武志 (2022a) 「音韻学の方法の衝突：『文海』甲種本の反切と体裁に基づく西夏語の音節構造の再考」『日本言語学会第 165 回大会予稿集』103-109。  
 濱田武志 (2022b) 「『文海』乙種本に見られる「繰り上げ」現象に関する試論」『日本漢字学会第 5 回研究大会予稿集』11-29。  
 韩小忙 (2006) 《文海宝韵》丙种本内容辑校。《西夏学》1: 125-151。  
 韩小忙 (2008) 《《同音文海宝韵合编》整理与研究》北京：中国社会科学出版社。  
 韩小忙 (2021) 《西夏文词典》北京：中国社会科学出版社。

- 平山久雄 (2018) 《敦煌《毛詩音》音韻研究》東京：好文出版。
- 贾常业 (2019) 《西夏文字典》兰州：甘肃文化出版社。
- 景永时 (2014) 俄藏《同音》未刊部分文献与版本价值述论。《北方民族大学学报（哲学社会科学版）》2014(5): 37-40。
- 景永时 (2016) 西夏文《同音》版本问题综考。《宁夏社会科学》2016(5): 199-205。
- 景永时・王荣飞 (2017) 俄藏黑水城文献未刊《同音》37B 残叶考释。《北方民族大学学报（哲学社会科学版）》2017(5): 35-39。
- Кычанов, Евгений Иванович и Аракава, Синтаро (2006) *Словарь тангутского (Си Ся) языка : тангутско-русско-англо-китайский словарь*. Киото: Филологические науки Университет Киото。
- Lai, Yunfan, Xun Gong, Jesse P. Gates and Guillaume Jacques (2020) Tangut as a West Gyalrongic language. *Folia Linguistica* 54(s41-s1): 171-203.
- 李范文 (2006) 《西夏研究 第2辑》《五音切韵》与《文海宝韵》比较研究 北京：中国社会科学出版社。
- 李范文 (2012) 《简明夏汉字典》北京：中国社会科学出版社。
- Matisoff, James A. (2001) Genetic versus contact relationship: Prosodic diffusibility in South-East Asian languages. In: Alexandra Y. Aikhenvald and R. M. W. Dixon (eds.) *Areal diffusion and genetic inheritance: Problems in comparative linguistics*, 291-327. Oxford: Oxford University Press.
- Mazaudon, Martine (1977) Tibeto-Burman tonogenetics. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 3(2): 1-123.
- 中村雅之 (2003) 「古代反切の口唱法」『КОТОНОНА』10: 1-4.
- Nevsky, Nicholas (Невский, Николай Александрович) (1928) Concerning Tangut dictionaries. 鈴木虎雄編『支那學論叢：狩野教授還曆記念』27-41, 2 figs. 京都：弘文堂書房。
- Невский, Николай Александрович (1960a) *Тангутская филология: исследования и словарь в двух книгах*. Москва: Изд-во восточной литературы。
- Невский, Николай Александрович (1960b) Материалы для изучения тангутского произношения. В: Невский (1960a), 107-131.
- Невский, Николай Александрович (1960c) Тангутские фонетические таблицы. В: Невский (1960a), 132-139.
- Невский, Николай Александрович (1960d) Тангутская письменность и ее фонды. В: Невский (1960a), 74-94.
- 聂鸿音 (1998) 《文海》韵的内部区别。《民族语文》1998(1): 68-77。
- 聂鸿音 (2015) 西夏字典中的非常规反切。《宁夏师范学院学报》2015(5): 68-72。
- 聶鴻音・孫伯君 (2006) 《黑水城出土音韻學文獻研究》北京：文物出版社。
- 西田龍雄 (1964-1966) 『西夏語の研究』(上・下卷) 東京：座右宝刊行会。
- 西田龍雄 (1981) 「西夏語韻図『五音切韻』の研究(上)」『京都大学文学部研究紀要』20: 91-147。
- 西田龍雄 (2012) 『西夏語研究新論』京都：松香堂。
- 小川環樹 (1951) 「反切の起源と四聲及び五音」『言語研究』19・20: 35-42; 198-199。
- 史金波 (1999) 西夏文写本《文海宝韵》。《民族语文》1999(4): 40-50。
- 史金波 (2002) 简介英国藏西夏文献。《国家图书馆学刊增刊：西夏研究专号》113-122。
- 史金波・白滨・黄振华 (1983) 《文海研究》北京：中国社会科学出版社。
- 史金波・黄振华 (1992) 西夏文字典《音同》序跋考释——《音同》研究之二。宁夏文物管理委员会办公室编《西夏文史论丛(一)》1-16。银川：宁夏人民出版社。
- Софронов, Михаил Виктрович и Кычанов, Евгений Иванович (1964) *Исследования по фонетике тангутского языка: предварительные результаты*. Москва: Изд-во «Наука»。
- 孙伯君 (2016) 西夏语声调问题再探。《语言研究》15(1): 34-41。

執筆者連絡先：

e-mail: t-hamada[at]inst.kobe-cufs.ac.jp

[受領日 2022年9月2日

最終原稿受理日 2023年10月10日]

## Abstract

**Concerning the Chronological Plurality of Tangut Phonology in the Light  
of “Pseudo-level Tone” in *Wenbai* (the *Sea of Characters*):  
The Limitation of Inferring the Sound of Tangut Characters**

TAKESHI HAMADA

*Kobe City University of Foreign Studies*

This paper discusses an untypical type of Fanqie in the Tangut rhyme book, “*Wenbai*,” in which the third character functions as a tonal specifier. We reveal the existence of “pseudo-level tone” characters. Amongst the Tangut characters in the first volume (level tone volume) of *Wenbai*, those with the tonal specifier, “rising,” are the *de facto* rising tone characters and should have been placed in the second volume (rising tone volume) whose theoretical inconsistency results from the inter-tonal mergers of the “rhyme groups.” These mergers have brought several “vacant rhyme groups” to the Tangut phonology of the Tangut Empire period, for example, the rising tone of R13, R32, R39, R41, R50, R83, R88, and R102. Tangut scholars have devoted their intelligence to designing an “ideal” system rather than reporting a strict and modern description. Intentionally and sensibly, they avoided the quantitative unbalance between a minimal pair of level and rising tone.

However, not all possible “pseudo-level tone” characters confess their real tonal category. The suspicion that a specific character belongs to the “pseudo-level” is not always self-evident. If we faithfully accept the axiom of traditional Sinitic phonology that the second character in Fanqie always represents the tone, a large number of possible “pseudo-level tone” characters would become subjects of consideration.

This paper attributes this problem to the clash of earlier and later methodologies. It is probable that *Wenbai*’s Fanqie contains vestiges of the early theory on the phonological frame. We can derive a new hypothesis from the proposition that the theory of Tangut phonology has a chronological plurality. Specifically, the arrangement of Fanqie characters is probably earlier than the establishment and adoption of the Tangut rhymes’ classification system.